



祇園町北側  
(八坂鳥居前東入)  
高さ 12.0m  
幹周 2.80m  
ばら科 / 落葉高木

公園のほぼ中央に位置するシダレザクラは、一重の彼岸枝垂で、淡紅色で径2cmほどの可憐な花を咲かせます。

江戸時代から祇園枝垂として知られ、人々に親しまれていました。現在の桜は2代目で、昭和2年に初代の種を実生したもので、初代が枯れた後、昭和24年にその実生から育った桜を当地に移植したのです。移植から50有余年を経て成木となった2代目は、市民や観光に訪れる多くの人々に見守られて、見事な花を咲かせています。



祇園枝垂  
佐野藤右衛門著『桜』から転載

## サクラ

国内には、ヤマザクラ、オオシマザクラ、エドヒガンなどを中心に、変種も合わせると100種以上のサクラが自生しています。さらに、これらの種から改良・育成された園芸品種を含めると、200種以上のサクラがあります。

サクラは古くから、私たちの暮らしと深く結びついていました。春の到来を告げる樹木として、農耕の開始時期や収穫を占う役割を担っていたのです。

京都では平安時代、紫宸殿の南庭に吉野のサクラが「左近の桜」として植えられていました。また、素性法師が「みわたせば柳桜をこきまぜて宮こそ春の錦なりける」

(古今和歌集)と詠んだように、市中にはサクラとシダレヤナギが多く植えられていました。この頃から、「花」といえばサクラをさすようになり、八重咲きや早咲きなどの品種も登場しはじめたと推定されます。

古代、花見は神事でしたが、平安時代には貴族の「宴」となり、江戸時代には庶民の行楽の一つとなりました。各地に様々な花の名所が誕生したのもこの時代です。

「祇園枝垂」の愛称で親しまれる円山公園のシダレザクラは、3月下旬から4月上旬に開花します。江戸時代にはすでに、「かがり火」を焚いて夜桜を楽しんでいたという記録も残っています。いつの世もサクラを愛でる人々の思いは変わらないようです。